「言語能力の育成」から見た国語科と他教科

横浜国立大学教育学部　高木まさき

Ⅰ　はじめに

言葉による学習、あるいは言葉についての学習は、国語科だけの問題ではない。にもかかわらず、国語科と他教科とは、そうした問題を共有してこなかった。そこで教育改革の議論がさかんな今日、言語能力の育成という観念から、教科横断的にこの問題を検討することには意味があると考える。そこでまず、筆者が国語科と社会科とを先の観点から比較した成果を報告することから始めたい。

Ⅱ　国語科と社会科における言葉と思考

社会科における学習の中心は、直接、物事・事象に触れ、それについて学習者自らが言葉による「意味づけ（説明）」を自身の力で獲得する過程にある、と考えられる。一方、国語科学習（説明文）の中心は、他者によって「意味づけ」られた教材文について、そこに書き表れた限りの論理と思考を学習することにある、とされる。だがここには、以下のような問題が潜んでいる。

社会科で言えば、「意味づけ」るということはある事象を切り取り、それらの関係を言語によって、一定の表現形式にまとめ上げることを意味するはずだが、その点に関する指導のあり方が見えてこない。つまり、ともに学習の範囲を限定することによって、本来、言語による思考活動が持っている全体性を分断し、それを統合する視点が欠落しているのである。

Ⅲ　読解学習

従来の常識に従えば、教材文の読解は社会科の問題ではない。だが、次の指摘は注目される。

「歴史記述を読んでゆくとき、われわれは『ことば』からたえず創造的に意味を生成させて歴史を理解しているのではあるまいか。（略）歴史を読むという営みは、読者にとって話者の歴史理解や歴史観まで無批判に受容することではないはずである。すぐれた読者は、話者の構成した『ことば』を自ら意味生成的に読み込み、自分の歴史理解を再構成した上で、話者の表現を逆に批評していく。そのような能力の育成こそ、歴史授業における読解指導の領域であろう。（吉川幸夫「社会科学習活動としての読解　―歴史記述のレトリックと読みの指導」『社会科研究』全国社会科教育学会　第39号　1991,3）

ここに述べられた創造的な読みと批判的な読みという二つの観点は、社会科が、一面的固定的社会認識からの解放をめざすとすれば、重要な問題と言える。そしてこの読みの問題はそのまま国語科の問題にも通じる。また批判的な読みという観点は、情報化社会を背景とした場合、教科を問わず、研究を深めていくべき課題であると言えよう。

Ⅳ　語句・語彙の学習

言葉の学習にとって、語句・語彙の学習指導は中核的な位置を占めるべきである。しかし、国語科では学習基本語彙等の研究はある程度行われてきたが、それが実践に生かされていない。一方、社会科でも、谷川彰英氏（「熟知度から見た社会科用語の検討」上・下『教育科学社会科教育』明治図書　NO, 331-332　1989, 12-1990,1）によれば、語句・語彙指導の問題について真正面から立ち向かった研究はないという。

その谷川氏は、社会科における難用語を、（1）なじみの薄い用語、（2）いいかえ用語、（3）あいまい用語、の三種類に分類し、その指導のあり方について検討している。この谷川氏の分類のうち、小学校の国語科では、（1）の「なじみの薄い用語」は問題になるほどには多用されてはいないが、（2）「いいかえ用語」、（3）「あいまい用語」などはかなり頻繁に用いられている。だが国語科では、これらの用語の指導の困難さを十分に検討してこなかった。この点で、社会科と国語科は交流をより深めていくことが望まれる。

また、両者の交流という点では、三上勝夫・矢部玲子氏（「小学校社会科教科書における語彙の分析」北海道教育大学紀要（第1部C）第42観第2号　1992, 2）の語彙調査に基づく提言が注目される。両氏は社会科と国語科の教科書の語彙の比較を行い、教科を越えて共通の基準を作ることの必要性を説いている。

Ⅴ　教科書の構成と文体

社会科の教科書の文章は、その不備が指摘されることが多い。その一因は、知識の詰め込みと言われる学習観の現れとして、事項の量が優先されることによる。また、社会科の教科書が学習活動の指示や資料提示などの多様な機能を果たすことがもとめられることにも、その原因は求められる。

しかし、文章教材とは考え方やその整理の仕方のモデルでもある。したがって整った文章に触れることにも一定の価値がある。だが、それは国語科の課題とされる。しかし、国語科は、一般に内容的な問題には深入りしないという立場であるから、結局、両者は分離したまま学習が生きた場で統合されることがない。教科という枠組みが言語による思考活動が持つ全体性を損なうという弊害は、教科書のあり方にも反映しているのである。

Ⅵ　その他の視点

上記の他、シンポジウムや研究会の中で、以下のような問題点が指摘されてきている。

二谷貞夫氏は、社会科教科書の現状は、やはり知識伝達機能の比重が大きく「覚えるための教科書」となっており、それを改善するには教科書の分量が少なすぎると指摘する。また語句語彙指導については日常語と社会科用語の二重性が問題であり、言い換えも不十分であると言う。さらに歴史用語等については、歴史観が大きく作用するものが多く、再検討を要するものも多いと指摘する。

細野二郎氏は、教科書に関する諸調査を踏まえて以下のような指摘をする。まず、各教科の教科書とも、学習者が一人で読んだだけでは分かるようにはなっていない。また語彙については各教科の教科書間での配慮が足りず､学習者にとっては不都合な状況である。さらに算数・数学や理科の教科書では、語句の表記、日常語や用語の使い方、文章表現や定義の仕方に問題が多い、など。

野村敏夫氏は、理科と国語科、社会科と国語科の教科書を具体的に比較し、その言語表現としての特徴を指摘した。その上で、学年進行とともに言語や記号に依存する度合いが高まる事を念頭に、各教科の教材文の分析を進めるべきだとする。また社会科や理科の学習が有効な語彙指導の場であることを確認しつつ、各教科の連携や教授＝学習過程における言葉の研究の必要性を指摘している。

安直哉氏は、言語の問題としてみた場合、理科教科書のあり方が、社会科教科書と同様に、結果がすべて書かれていて、言葉による観念の連合のみにより事象を理解させるおそれがあると指摘する。また理科学習を語彙指導の場として位置づけることも提案している。

棚橋尚子氏は、社会科が表現力を重視しているにも関わらず表現形式の指導が不備であることについて実践例をもとに指摘した。そして実は国語科においても表現指導が十分に行われていないことを指摘し、それらを補うために場合によっては「方法科」のようなものを設けることも考える必要があると指摘する。

寺井正憲氏は、言語教育という観点から、国語科の内容や位置を問い直し、学校教育全体を問い直すことの必要を説き、その実現のための三つの研究領域を指摘する。まず、国語科教育が他教科における言語活動や思考力の指導などにどれだけ寄与しているかを検証する。次に、他教科の言語活動を国語教育の契機として活用する視点を設ける。その上で言語教育を中核として、学校教育の再創造を行う、の三点である。

村井護晏氏は、理科においても、言葉で説明しておくことが大切であることを指摘した。また、1970 年代末の教科書調査をもとに以下の点を指摘する。名詞の数は増大傾向にあり、特に専門用語は関連用語を伴って出現し、小５の用語数が多い。一文の長さは短くなり、段落の長さも短くなっている。概念語同士の結びつきの強さは密になっており、枝葉を落とし理科の根幹を学習させる傾向が強まっていること等を指摘する。

細井勉氏は数学言語研究会などでの研究成果をもとに以下のような指摘をした。国語科では漢字の意味をできるだけ広く教えてほしい。日常の会話をきちっと話すような国語教育を行ってほしい。接続語などを使った論理的な表現の仕方をしっかりと教えてほしい、など。

Ⅶ　まとめ

上記の通り、言語は各教科学習の根幹であり、また授業の成立要因でもある。言語能力の育成という観から学校教育を問い直す作業は、教育改革を推進する重要な視点となるのではないだろうか。